

古代の文學 前期

日本文學講座

I

河出書房版

古代の文學 前期

I

日本文學講座 第一卷

古代の文學 前期（第八回配本）

昭和二十六年六月二十五日
昭和二十六年六月三十日
初版印刷
初版發行

定價 二百圓

著者代表 高木市之助

編集者 河出書房內 杉森久英

發行者 東京都千代田區神田小川町三ノ八 河出孝雄

印刷者 東京都文京區戸崎町七一 小泉輝章

發行所 株式會社 東京都千代田區
神田小川町三ノ八

河出書房

會員番號A一一〇一四番
電話神田（25）三一七四番

目

次

古代社會と文學……………	高木市之助	三
文學の發生……………	大久保正元	元
古代歌謠……………	小島憲之	三
萬葉集……………	五味智英	五
歴史と文學……………	太田善麿	五
說話・傳説……………	松本信廣	二
風土的文學……………	久松潜一	一七
古代演劇論……………	折口信夫	三

日本の漢文學……………山岸徳平 四

(作家研究)

柿本人麻呂……………土屋文明 三

山部赤人……………森本治吉 五

山上憶良……………金子武雄 五

大伴家持……………次田眞幸 六

萬葉集の女歌人……………佐佐木信綱 三

古代社會と文學

高木市之助

この稿で私が意圖している事は、古代社會と古代文學の關係を前者から考える代りに、後者から考えて行こうという事である。私のように文學を専攻している者にとつては、すべてが文學からでなくてはならぬ。その意味に於て私の場合古代社會というのは、必然に、或はやむなく文學の窓からのぞいた古代社會のすがたでなくてはならないのである。換言すると、日本の古代社會に生れて來た文學を調べたり考えたりしてそこにそのような文學を通してどんな古代社會を吾々として、或は吾々の專攻の立場から捉えらるるかという事に外ならないのである。

そのようにして私は古代文學を形成する民謡、叙事詩、說話文學、抒情文學という、四つの窓からそれらの社會、つまり民謡の社會乃至抒情文學の社會といったような關係を求めようというのである。

一

古代文學へ反映する最初の社會は民謡の社會である。といつても實はこの命題には一つの條件がつく。というのは古代文學へ反映する社會はと、たつた今言つたけれど、民謡が果して文學と言えるかどうかは嚴密には問題なのである。この事實を英のシジウィック (H. S. Giddick) というバラッド學者が誠に巧みに譬えているが、彼は言う。バラッド (こゝではそれをそのまゝ民謡と置き換えても差支はない) を文學の中の一つのジャンルとして考えていこうという事は、動物園を訪ねた人が、そのケースの中に保存されている、前代の巨大な動物 *ichthyosaurus* (魚龍) を、園中に飼われている諸動物と同一の範疇に入れて考えようとするのと同じである。なぜなら、バラッドはその本質に於て一つの記載形式では全然なく、隨つてそれは文學それ自身の一つのジャンルというよりもむしろ文學以前の、隨つて文學に對立する文學以外の一つのジャンルというべきだからである。もしそうなら、このような民謡へ反映される古代の社會もまた極めて素樸原始の段階を脱してはいないという意味に於て一種の原始社會であつた筈である。具體的に言つてそれは民衆が政治組織や文字文化によつて畫然とした階級に別れない社會であり、そこには觀念や感情の共有があるだけで、何等主觀性や自意識を認め得ない、謂

わば等質（ホモジーニアス）の社會である。そしてそれは社會がその發展の最初に必ず出くわすと言われる段階であり、社會史的觀點から推せば、それが文化社會に進む以前に經驗しなくてはならぬ基礎的な段階として存在した筈のものである。唯併し本稿で私が考えた事は、そのような社會學的な抽象論をこゝにくりひろげようという事ではない。そうではなくて却つて當時の民謡的作品の構想力自體の中に、そのような等質的社會に照應する「形」があるかどうかという事なのである。たとえば記紀にいざなぎいざなみ二神の唱和として記載されている「あなにやしえをとめを」「あなにやしえをとこを」は古事記傳所載師説（眞淵説）のように「かくの如くのためひ交せるはいと上つ代の交合の初の禮なるべし」と解するか、或は更に一步を進めて橘守部の稜威の道別の説のように、本來は一種の本能的表示であつたのを後に男女がよび交す「つまどひの言葉」に言い移したものとすればこの唱和に反映しているものは、上述のように等質的原始の社會であつて、個性の發達した文化社會ではあり得ない事になる筈であるが、この唱和の構想の中に果してそのような等質的なものを求め得るかどうか？ 答えはしごく簡單に肯定的である。なぜなら、「あなにやし」という語は諸説が一致しているように愛情の表現に相違はないが、それにしても何という素樸な發想であらうか。人は愛情を言葉に造形するためにこれ以上根源的にする方法を求めることは出来ない。そこには貴族もなければ、農奴もない。というよりも逆にそれは治者の貴族でもあれば被治者の農奴でもあるからである。又例えば古事記記載の須佐之男命の「やくもたつ」の詠にも事情は同じである。今一々説明をくりかえすことは控えるが、諸説にあるように、本歌を和歌の起源とすることには検討を要するとしても、短歌型の極めて初期に屬する一例であることには異議がない。吾々には短歌型が確立したおよその時代をそんなに遠く溯らせることはいかがかと思ふけれども、それにも係らずこの短歌の型が萬葉所收の歌などに比べると、遙かに素樸であり、記紀歌謠所收の型の中でも特に素樸なそれであることを知るのである。具體的に説明すれば、記紀歌謠の中には、往々にして第二句の七言をそのまゝ第五句にくりかえすという特

に素様な型がある。例えば

やまとべにゆくは、たが、つまこもりづのしたよはへつゆくは、たが、つま
たちひぬにねむとしりせば、たつこももちて來ましものねむとしりせば、

ところが「やくもたつ」の詠はいわばこうした型に先立つて考えられる型以前の反覆であつて、「八重垣」という語が三十一字中に三度もくりかえされているにも係らずそれは「いづもやへがき」「やへがきつくる」「そのやへがきを」という風に形成の上に何の自意識も豫想されず、そこには構想力以上の原始的な民謡の有つ即興的性格以外の何物もない。そしてこのような民謡の即興的生産を可能ならしめる社會は、文化社會というよりむしろ原始素様な、隨つて未分化等質の部落的集團にすぎなかつた事を想わせるに十分である。つまり吾々は民謡を通してそれ等の民謡を生んだ或る原始的な自然社會を想定する事が出来るわけである。隨つて文學なるものを人間がその構想力によつて生み出す一つの文化であるとすれば、このような原始自然の社會の産物を文學の中の一つのジャンルと認め得るかどうかは問題であつて、その意味で私は前述のように、民謡を前世紀の魚龍に擬したシデウィックの巧妙な譬喩に贅せざるを得ないのである。

二

古代文學へ反映する次の社會は叙事詩の社會である。それはよく英雄時代の名で呼ばれる社會であり、その事は直ちに叙事詩を英雄詩と呼ぶことに連なる。ところで現實の問題はそのような叙事詩乃至英雄詩が果して日本の古代文學に求められるかどうかという大きな課題なのであり、これを裏がえすと、日本の古代社會にそうした英雄時代を求め得るかどうかという問題になるであらう。私はかつて記紀歌謡の世界に英雄時代の影を求めて、神武天皇東征の條に出て來る一聯の歌謡群にそうした時代を豫想したことがあるが、(拙著「吉野の鮎」参照)この

事はしばらくこれに譲るとして、このような叙事詩的文學乃至精神はその後壓倒的な大陸文化の殺到によつてそのまゝあとかたもなく押し流されてしまつたかどうかという次の問題が考えられなくてはならぬ。管見によると、萬葉集に於ける人麿作歌並びに人麿歌集所出歌に求められる人麿的なものの少くとも一つはこの叙事詩的な詩精神の或る意味に於ける展開であり、或る他の意味に於ける殘存であり、謂わば前期神武歌謡の行くえをこゝにつきとめ得ると考えたい。勿論この場合、兩者は記紀の記述のように殆ど古代史の兩端に引き分れているのではなく、むしろ一續きの系列であつて、隨つて英雄時代の名によつて呼ばれる社會は兩詩を結ぶ一線の上に投影されているものとして考え得るであらう。一體人麿の作歌乃至人麿歌集所出歌として萬葉に收録されている長短旋頭歌は萬葉集中の他の諸作品に比べその性格に異色があるが、中でも、卷二に高市の皇子の殯宮の時の作を中心として擧げられている諸挽歌は集中の他の人麿の作歌等に比べても特に異色があり、是等の歌を集中一般の抒情詩的作歌とひとしなみに扱つたり、又人麿を以て宮廷に仕えた職業歌人の一代表と考えたりすることの出來ない何ものかがそこにある。それは何であるか。

私のいつもの手口からすると、こゝでは作品の一つ一つに即してそこから人麿のこの異色を考えて行く筈であるが、分量に制限を必要とする本稿ではそれは不可能で、とかく抽象的な物言いになつてしまふおそれがあるが、例えば有名な上述高市皇子尊の挽歌にしても、あの長歌の有つ質量感は、よく言われるような人麿のマンネリズムや、又彼の宮廷歌人意識を以てしては割り切れない何ものかであり、かと言つて又反對に人麿の巨大性とか情熱とかいう個性的な又作家的な天分といった事だけで解く事も困難な何物かである。私はそこに從來の人麿批判の尺度に、このような人麿的なものを測り得ない何物かがあつたのではないかと思う。つまり彼の作、特に皇室挽歌や行幸讚歌が作られた契機は、後代の文學の場合とちがつて人麿という個の作家に屬していないし、かといつて宮廷歌人的な職業意識にも屬していない。そこには等質的な自然人から個性的な個人が生まれて行く或

る經過時代の民族のありかたがまぎ／＼と窺えるのであつて、それこそ所謂民族的敘事詩の時代として通用する日本文學の段階がなくてはならぬのである。人麿はこの長歌の反歌で

植安の池の堤のこもりぬのゆくへをしちに舍人はまどふ（卷一二〇一）

と詠んでいるが、この舍人^{おなり}意識こそこのような質量のある、獨白の挽歌を生んだ母胎でなくてはならぬ。尤も舍人とはこの場合職員令で規定されている、謂わば制度としての舍人ではなく、時代と歴史を負う現實のそれである。具體的に言うと、壬申の亂で天武天皇を支持し、時には天皇と吉野へ逃げこんで苦患を共にし、時には天皇を擁して東方から近江大津の宮へ進撃した舍人なのである。そうした舍人達が亂の平定後天皇やその皇后（持統天皇）を支持して藤原宮の政治の、行政的というよりもむしろ行動的な擔當者として生き動けた消息は斷續的ながらも書紀などの文獻が傳えるところで、彼等が亂の功臣として相前後して亡くなつて行く時期が、一方で同じ舍人の人麿が宮に仕えて彼の文學を養い育てていた時代だつたのである。つまり同じ舍人が一方では壬申の亂を行動し又文學を遺したので、文學は人麿に於て謂わば社會性と個性が調和されていた「舍人」によつて作られたというべきであらう。もつと言えば壬申の亂を推進させた意欲的行動的な人と、この亂の主役であり指導者であつた高市の皇子尊の死をうたつた挽歌の作者とは舍人としてアイデンティファイされるのであつて、このように考える事によつて、又よつてのみ、この挽歌の有つ逞しい質量感を正しく理解することが出来ると言えよう。人麿の歌にあるリアリスティックな反抒情性といつたような性格は、別に人麿歌集の用字に關聯しても言い得るが、この事に就ては輪廓的ながら既に發表した事もあるので省略に従う。このようにして吾々は記紀所收の神武天皇の歌謡群から舍人人麿の萬葉挽歌へ一筋の敘事詩的系譜を辿ることが出来るのであるが、もしそうなら、吾吾はこのような文學の裏に、或は表に、丁度之に照應する意欲的行動的な、そして壬申の亂を契機とし、舍人を動力とする現實の社會を豫想することが出来、そして人麿のそのような挽歌が、敘事詩としてはかなり不純な、

又殘存的な、和歌的文學でしか無かつた程度に、この社會も亦不純で殘存的反敘事詩的社會だつたと言ふ外はない。併しながらそのように不純なものであつたとしても、吾々がとにかくにも萬葉初頭に敘事詩的文學の遺産を持つという事は、一般に日本文學の敘事詩性を考える場合に一つの重要な出來事でなくてはならない。例えば和歌の抒情性が日本民族にとつてどの程度に先天的或は宿命的なものか、それとも又どの程度に後天的或は時代的のものであるかというような、根本的判斷に對してこの事實は少くとも一つの資料を與える事は出來よう。現に萬葉集中人麿に次ぐ時期に憶良という特異な歌人が出てゐるが、彼の出現は、人麿のこのような敘事詩的殘存といつたようなものを考えることによつて始めて日本文學の歴史的展開の一環として考えることが出來、そうして又彼の地位をこのように正しく置く事によつて、吾々ははじめて、文學史上の一つの歴史的事實としての壓倒的な抒情主義を疑うことが可能になるであらう。又萬葉集の時代、換言すれば奈良朝に於てあのような政治や制度の下に爲政者の一つの指導精神として大君への絶對服從が聲高くうたわれたと見る見方は從來の萬葉觀を大きく反省させられたという意味に於て注目すべきであるが、唯そのような見方を逆に、人麿の上述のような、敘事詩的世界へ持ち越して、この古代的な逞しさを見失つてはならないであらう。例えば卷二十所收の防人歌はそれが庶民層の人々の作歌を含むにも係らずそこにうたわれている大君への忠誠がそうした指導者の意識の介入の爲にしばしば聲弱いものになつてしまつてゐるのは事實であるが、丁度それとは反對に人麿の場合は、この確かに宮廷の一人の官僚であつた人麿であつたにも係らず、そこにうたわれているものが、殊に半ば公儀的な宮廷輪歌に於てすら、意外にも雄建高朗であるのは、未だに彼のそのような敘事詩的な民族意識が殘存していたからでなくしてはならない。こうした敘事詩性の關する限り彼の文學は貴族的というよりもむしろ庶民的であり、個性的というよりも、むしろ民族的である。そしてすべての庶民的民族的の文學がさうであるように人麿の文學も亦それ故に一層當時の社會に直結してゐるのであつて、即ち、吾々はそのような人麿の作品を生産した者として彼をと

りまく社會そのものが當時このような、素樸ではつらつとし、意欲的であつた事をこの文學上の事實を通して信じてよくはないか。壬申の亂の真相に對しても色々の角度から色々の見解が考えられているが、このような内亂を、少くとも一つの母胎として生れた、舍人人麿の文學を通して見る限りそれは現實から浮き上つた近江朝廷の施政に對する庶民的なもの、民族的なものの抵抗反撥が行動化されたものであり、天武天皇は舍人等にとつて天皇というよりもむしろ彼等に殘存した彼等の英雄ではなかつたか。なおこうした考察には、實は具體的な作品の一つ一つの裏づけが用意されているのであるが、本稿ではそのすべてをカットしてしまつたために、このように骨格的な結論になつた譯で、この點他の機會に一々の作品に話を戻したいと思つてゐる。

三

次は説話文學の社會について。

古事記がその本質に於て、必ずしも、自然發生的に成長結成されて行つた一篇の民族説話といつたようなものではなく、或る政治的意識の下に編纂された創作説話であることは、津田左右吉博士以來の謂わば一つの學問的常識であると言つても過言ではないほどであるが、さてそれでは、そのような編纂に由つて、かつての民族が語り傳えつゝ培養していつた民間説話 (FOLKLORE) はどうなつたか。というよりもそのような説話を生み、生かし續けていた、眞に民族的な意識はどうなつたか。それは古事記を編纂した國家意識に服從して、ありし日の意氣を喪い、たゞ斷片的な形骸をこゝかしこに残すのみであるか。こゝに大きな問題があるのであつて、同様の關係は日本書紀についても考えられなくてはならない謂わば共通の課題であらう。この問題に對しても私としては多少の文献の準備があるが、本稿としては遺憾ながら前章同様骨格的なものに止まるであらう。

結論から言つて、日本古代民族の素樸で健康な精神が所謂律令國家の支配に屈服することはなく、はつらつと

生きて行く様相を如實に語られているのが古事記日本書紀であり、又記紀相互の對照である。尤もそれは意識的な意味に於てではなく、却つて幾分逆説的な意味に於てである。書紀は勿論古事記にしても、それが一全體としてよく文學の名に堪え得るかどうかは問題であるが、そこに大きく働きかけてくる政治的な意圖にも係らず、本來自然の民族意志がその間をくぐるようにしてよく之に抗し民族自身を主張している關係は、後代の個性の文學に見られる創造的な構想力に比べて決して異質のものではなく、吾々はその限りに於て、謂わば記紀のそうした關係に於てのみは「文學」を肯定しなくてはならないであらう。例えば、古事記編纂の目標は山田孝雄氏がかねがね提唱されているように序文の「邦家の經緯、王化の鴻基」を確立するところにあつたと考えられ、そしてそのような目標の説話的根幹をなすものは同じく序文の第一段で「乾坤初分、參神作造化之首云々」から「正姓撰氏勒于遠飛鳥云々」に至る各條の説話であると編者によつて考えられた筈である。ところが之を本文に照合してみると、その説話的構造に於てこうした編者の計畫と必ずしも相容れない部分が少くない。一例を挙げると、序文で「論小濱而清國土」とあるのは、本文では、伊那佐の小濱で大國主神が建御雷神との問答によつてその代の領土を天照大御神に讓る説話に相當して居り、大國主神を主人公とする諸説話の中邦家の經緯云々に結びつけられそうなのを挙げるとすれば、さしずめこの條が選ばれるべきだつたと思われるけれども、それならば記の編者はなぜ之に先立つてあんなにも饒舌に大國主神を主人公とする數々の説話を物語らなくてはならなかつたか。しかも是等の説話は天照大御神の皇統によつて邦家が統治されてきた經緯とは何のつながりもないばかりか、こゝにあのよう到大國主神のむしろ善政や博愛を語ることはその効果から言つてマイナスでさえある。この矛盾に對しては從來とても種々の説明が行われているが、もしも古事記の編纂者達が序文にあるような、又諸學者が論じているような上述國家的政治的目標を持つていたとするならば、それにも係らず彼等がこゝにこのような大國主神に關する諸説話をこれほど多く又委曲に語らなくてはならなかつた所以は、彼等が説話に拙い爲、偶

然にも均衡を失したなどと言う無邪氣な事情によるものではなく、もつと必然に、そこにこころした國家の意志に抗して強く主張している、民族というか庶民というか、そうしたもののもう一つの意志が動いていたからに外ならないのではないか。これに類似した關係は記と紀の對照の上からも考えられる事で、例えば雄略天皇は記と紀ではその性格がいちじるしくちがつてゐる。記に物語られてゐる天皇の暴行は、暴行といつてもどこかに明朗で無邪氣な憎めないものがあつて、いかにも民族の英雄であるが、書紀の方の雄略天皇には、政治的な、おいが濃厚で大陸傳來の史書によく、賢王の善政に對立させられる爲に描かれてゐる暴君の暴政を想わせるものがある。書紀編纂者の意圖を忖度するなら、中國の當時の代表的正史がそうであつたように、之に倣つた書紀にも、歴代の聖賢王に介在して、時には紂王式の暴君を語ることも亦有り得る構想の一つではなかつたかと想像されるのである。こゝに人々はこのような書紀と對照することによつて一層はつきり古事記の持つ、比較的純粹な民族説話の構想力に魅力や威力を感じるであらう。併しながらこの事は決して單なる文學の世界の中だけの出來事ではない。記紀にこのような對照を可能ならしめたものは、これを生み出した社會そのものの持つ一つの對照でなくてはなるまい。即ち記紀に於て強力な國家的意圖にも係らず、民族意志とでも言えそうなものが之に抗して誠に旺盛に生きてゐるという事實はそのまゝ、記紀を生んだ社會そのものに於ける國家的なものと民族的なものとの何よりも一番生きてゐる關係を反映してゐると見るべきであらう。

さて、古代文學を力強く推進させ、或は抵抗して來た民族的又古代的な力は時代の推移に伴なつて漸次衰え弱つて行つたようである。これには管見によると少くとも二つの事情があるようで、即ち一つは漢字漢文の浸透であり、他は抒情性のびまんである。